

# 歴史を語る建物たち

第4回

今日、20世紀型の開発優先社会は終息を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

## 旧黄金村役場（鶴岡市）



JR鶴岡駅から南西の方向に車で20分ほど行ったところに、国指定の名勝、霊峰・<sup>きんぼう</sup>金峯山がある。そのふもとに、今は使われていない木造2階建ての建物が建っている。

昭和28年～30年頃のいわゆる「昭和の大合併」によって、当時の鶴岡市と合併した旧黄金村役場（昭和11年建設）である。

### 金峯山と共に歩んだ村

金峯山のふもと一帯には、鎌倉時代にはすでに住民が定着し、部落をつくって農耕生活を営んでいたといわれる。金峯山は、羽黒山のように修験道が盛んだった時代もあるので、神社や寺が多く、周辺部落は信仰の地として栄えた。

明治21年、政府が市制および町村制を施行すると、同22年4月に周辺9村が合併して黄金村が誕生した。これが、今にいう「明治の大合併」である。

明治24年に最初の役場が完成し、昭和11年に現存の建物となった。6代目村長、<sup>かんのおまききち</sup>神尾政吉（1868-1943）

の頃である。

神尾村長は、黄金村歴代9人の村長の中では最も在職期間が長く、明治44年3月から約30年にわたって郷土の発展に尽力した。また、役場庁舎の新築にあたっては、物価の変動が激しい時代にあって、物価の上昇時に建築費を積み立て、物価の一番安い時期に着工するという“妙技”を閃かした。

しかし、昭和28年、町村合併促進法が施行され、「昭和の大合併」が始まると、黄金村は他の町村とともに、隣接する鶴岡市（当時）に吸収合併されることになった。

そして、昭和30年4月1日、黄金村は鶴岡市と合併し、約70年の歴史に幕を下ろした。

### 藤沢周平も職員を務めた

わが国を代表する時代小説作家・藤沢周平（1927-1997）は、昭和2年12月26日、黄金村大字高坂（現・鶴岡市大字高坂）に生まれた。昭和17年に黄金村国民学校高等科を卒業すると、担任の薦めで旧制鶴岡中学

直木賞作家・藤沢周平。藤沢は、旧制鶴岡中学校（現・鶴岡南高校）夜間部在学中、故郷の黄金村役場で働いた。なお、生家跡には石碑（筆・酒井家十七代当主酒井忠明）が建っている。出典：『図説 庄内の歴史』（郷土出版社）



校（現・鶴岡南高校）夜間部に入学し、昼間は鶴岡印刷株式会社で働いた。

しかし、1年後の昭和18年、黄金村職員に欠員が出たことから、藤沢は、請われて故郷の村役場に移り、税務課書記補として、徴税令書の作成や地租の計算などに従事した。

当時、役場では、昼休みに庄内藩校致道館ゆかりの「論語抄」を読む習慣があり、それを指導したのが、藤沢の役場就職を世話した助役の高山正雄（1911-1998）であった。

また、藤沢はしばしば高山家を訪れ、高山の書齋で、老荘思想や、吉田松陰と松下村塾の門下生などの話を聞き、歴史書などを借りて帰った。時には真夜中を過ぎることもあり、夜道は狭い切り通しであったが、「自転車を飛ばす私は話を聞いた興奮が残っていて、少しもこわくなかった」と、後に藤沢は記している（藤沢周平『半生の記』）。

こうした体験が、藤沢の作家人生に影響を与えたことは想像に難くない。

なお、藤沢は、ラジオから流れる終戦の玉音放送を役場の控え室で聞いたという。そして、翌昭和21年に中学校を卒業すると、山形師範学校（現・山形大学）入学のため、役場を退職した。

## 合併後の末路

さて、鶴岡市との合併により、旧黄金村役場は鶴岡市役所支所となり、同時に公民館が設置された。

昭和35年、鶴岡市役所は各支所を廃止し、支所業務を公民館に委任した。これによって、旧黄金村役場は

「鶴岡市黄金公民館」となった。

その後、昭和53年に黄金公民館が廃止され、代わって黄金コミュニティセンターが設置された。しかし、平成8年に黄金コミュニティセンターが移転新築されてからは、旧黄金村役場は用途がない。

また、県の調査でも、文化財の部類には入らないと判断されたため、現在は鶴岡市契約管財室の所管となっている。同室は、行政目的のない市の財産を管理する部署だが、誤解を恐れず言えば、ここは“建物の墓場”に近い。事実、廃館以降は10年近く雨ざらしで、隣に保育園があることから、地元では安全面から解体を要望する声も寄せられている。

同室では「旧黄金村役場については、解体か保存かも含めて、今後の予定は全くの白紙」と話すが、うがった見方をすれば、保存する理由がなければ、解体は避けられないということかもしれない。

なお、「昭和の大合併」で、当時の鶴岡市は12町村（昭和38年に合併した大山町を含む）と合併したが、旧町村役場で現存しているのは旧黄金村役場と旧西郷村役場（現・西郷土地改良区）のみである。

## 重要な観光資源

鶴岡市は、平成18年12月に「藤沢周平記念館」の基本計画を公表した。それによると、建設地は鶴岡公園内で、藤沢周平の没後10年となる19年度からの着工が予定されている。一時は、旧黄金村役場を記念館にという声も愛好者の間ではあったようだが、日の目を見ることはなかった。

しかし、平成17年12月の市議会定例会で、富塚陽一・鶴岡市長は「（記念館については）海坂藩を原点として、城址に拠点があってしかるべき」と述べつつ、「（観光客の中には）懐かしさ、あるいは興味を持って巡回される方々もおられるでしょうから、可能な限り施設の整備について配慮し、庄内あるいは鶴岡全体が藤沢文学のミュージアムになるというようなコンセプトで運営をしていくのがいいのではないかと答弁している。その際、「（藤沢周平の）出生地の高坂方面に何か」ともほのめかしている。

一時期とはいえ、藤沢周平が実際働いた職場が現存しているのは貴重なことだし、そこで終戦の玉音放送を聞いたという事実は極めて興味深い。

また、隣接する金峯山は「臍曲がり新左」（昭和51年）に描かれ、さらに、藤沢周平の出身地（高坂）は「三月の鮠」（平成3年）に登場する。これら結びつけられれば、「藤沢ミュージアム・黄金編」が出来るのではないだろうか。

藤沢周平を観光の目玉にしつつ、まだ彼の息吹が残る建物が消えてしまう“矛盾”が生じないことを、心から願っている。（荘銀総合研究所研究員・山口泰史）